

ユニセフ南スーダン事務所
モニタリング評価担当官・
幸村真希さん語る

7月、首都のジュバで5日間ほど政権内対立による戦闘が起きました。2013年12月に勃発した内戦は去年8月に和平合意ができ、今年2016年4月には暫定政権が樹立したので、前へ進むのではないかとという機運がありました。避難していた人も元の村へ戻り始め、私たちも命を救う緊急人道支援から落ち着いた国づくりのための支援へ移行するという希望がありました。それが、すべて元に戻ってしまいました。

戦闘後、国外退避という措置が決定され、私は隣国ケニアのナイロビに移りました。空港に行くまでの様子は落ち着いていましたが、ジュバでも戦闘の激しかった地域では破壊や略奪、性的暴力が起きました。

2013年12月以降の紛争で国民の5人に1人、約240万人が故郷を追われています。7月の戦闘を機に隣国ウガンダの難民キャンプへ7万人以上が流出。国内では、住民は親戚や知り合いのところに身を寄せたり、教会や学校、あるいはブッシュや野原といった、本当に何もなかったところに戦闘を逃れるため隠れています。

国民の40%、480万人が深刻な食糧不足に直面し、とくに5歳未満の重度栄養不良児が36万人いると推定されています。加えてコレラやマラリアが流行するシーズンであり、はしかの感染拡大も懸念され、まさしく人道危機という言葉どおりの状況です。

南スーダン独立から5年
戦闘ふたたび、480万人が人道危機に



南スーダンで2016年7月に行われた栄養状態の緊急調査(MUAC)。5歳未満児の二の腕中央部外周を測定し、栄養不良児には治療を行う。© UNICEF/UN027026/Gonzalez Farran

ユニセフも緊急の対応が求められています。南スーダン事務所にRRM(Rapid Response Mechanism)という仕組みがあり、緊急を要する場合、遠隔地・治安悪化でNGOが入れない、忘れ去られて地図にも載らないような村にユニセフが直接支援を届けるというものです。連携するWFP(世界食糧計画)などのヘリコプターで現地に入り、スタッフは野営をしながらひたすらワクチン接種や栄養不良児の治療、水・衛生関連の物資配布といった支援を行っています。RRMの合言葉は「No regret policy」。「あのときあしておけば」という後悔は、南スーダンではその子はもう死んでいることを意味します。そうならないために今スタッフは集中的に活動をしています。

アフリカ全体が成長へと向うなか、南スーダンはいつまでこんな紛争をしているのかと残念に思います。前に進んでいるのかといえば、国としては難しい状況にあると言わざるを得ません。

ただ個人の人生というのは何があっても必ず前に進むと思います。大きな紛争になって何千、何万人単位のデータは現状を伝える大切なデータですが、それは一人ひとりの集まりだと思うと、この仕事はやらないといけないし、やり続けたい。今は本当に毎日が勝負です。日本でもそれに共感してもらえるなら、忘れずにいてほしい。(聞き手・近藤)



幸村真希さん

contents

活動フォトニュース.....2
 この人に聞く 第7回
 柴田紘一郎さん.....4
 活動紹介 遊び道具づくり.....6
 活動日誌(8月~10月).....7